

令和5年度

関市総合教育会議

会議録

(令和6年1月23日)

関 市

令和5年度関市総合教育会議

1 日 時

開会 令和6年1月23日（木）午後4時00分

閉会 令和6年1月23日（木）午後4時55分

2 場 所

関市役所 3階 庁議室

3 構成員で出席した者

市長	山 下 清 司
教育長	森 正 昭
教育長職務代理者	末 松 桂 子
教育委員	西 部 美 晴
教育委員	清 水 徹
教育委員	米 山 英津子

4 説明のために出席した者

教育委員会事務局長	後 藤 勝 巳
教育総務課長（会議録書記）	遠 藤 英 治
学校教育課長	平 田 昌 隆
学校教育課主幹	志 手 士 郎
まなびセンター副所長	寺 澤 徹 夫

5 出席した事務局職員

教育総務課課長補佐	廣 瀬 正 則
-----------	---------

6 傍聴者

2名

7 協議事項

- (1) 関市フリー教室（L教室）の現状について
- (2) その他

議事内容（概要）

○後藤教育委員会事務局長

定刻となりましたので、ただいまから令和5年度関市総合教育会議を開催いたします。はじめに、山下市長からごあいさつをいただきます。

○山下市長

皆さま、こんにちは。お忙しい時間に、総合教育会議の方にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

私は、市長になって初めての総合教育会議ですので、どうぞよろしくお願いたします。これまで、副市長を務めていましたので、不登校児童生徒の状況については、認識をしているつもりです。また、選挙中にもいろいろな方と話をする中で、学校に行けていない話を聞くこともあり、そういう方への手当てをしっかりとしないといけないと感じた次第です。そのことを踏まえて、今、この立場になったので、余計にそういうことは、手当てしていかないといけないと認識しています。ご存じのように、教育委員会としては、今年度から、緑ヶ丘中、旭ヶ丘中、桜ヶ丘中の3校で、L教室を開設され、成果を上げていただいていると伺っています。また以前から、小学生の不登校対策として、ふれあい教室を開設してご尽力いただいています。

子どもは学校へ行けない、教育委員会としては学校に来てもらいたいというところのギャップが結構ありますので、今後は、そのギャップを何とかして手当てしたいと思っています。

令和6年度に向けて、フリー教室をさらに充実をするというように進めていこうとしておりますし、ふれあい教室についても、こちらで待っているだけではなくて、地域へ出向いていくようなことも考えていただいているということです。また、現在は、心の相談員を全校に配置がなかったと思いますが、来年度には、全校に配置をしたいということと相談しているところです。さらには、子どもたちが、今、タブレットで学ぶ環境は整っていますが、なかなか、直に、自分の悩みを伝えられないというところがあると思います。「ここタン」というシステムを利用して、今日の自分の気持ちがブルーなのか、ハイなのか、普通なのかみたいなことを5段階ぐらいで発信できるようなツールがあるということとでございます。希望する8校にこのシステムを導入することを検討しています。

また、地域においては、ふれまちや地域委員会などでの居場所作りというの、お年寄りのサロンのようなイメージで、学校にたまたま行ってない子もそうですし、様々な機会を捉えて、その居場所を地域で作って、地域で子どもたちを見守っていただけるような環境を皆さんにご協力いただきながら、進められたらと思っています。

今後、これらのように予算の上でも私なりの色を出していきたいと考えているところでございます。皆さんにはいろいろご審議いただき、ご意見をさらに賜りたいと思いますので、どうかよろしくお願いいたします。

○後藤教育委員会事務局長

ありがとうございました。この会議の進行でございますが、この会議は市長が主宰し行うこととなっておりますので、以降の進行は山下市長にお願いしたいと思います。よろしくお願いたします。

○山下市長

それでは、ご案内の次第に従いまして、進めさせていただきます。

今日の協議事項は、「関市フリー教室（L教室）の現状について」ということでございます。それでは、事務局から説明をお願いいたします。

○寺澤まなびセンター副所長

（モニターテレビにプレゼンテーション資料を写して説明）

お手元の資料をご覧くださいながらお聞きください。

今年度から、新規事業として、市内の3つの中学校にL教室を配置しました。目的はですね、生徒が自己選択して学習、生活できるように社会的自立を促す、そして学校の不登校対策を充実させて、不登校を減らす取り組みを推進するということでした。緑ヶ丘中学校と桜ヶ丘中学校には会計年度任用職員の室長を配置しましたし、旭ヶ丘中学校は現役の主幹教諭を室長に任命して進めているところです。学校の不登校対策を充実させる上で、情報を共有して組織的に対応できるようにする仕組みを作る、このことが大切なんです。これは、それを模式的に示したものでございます。

次は、生徒が自己選択して学習、生活できるようにするために、L教室用の時間割を各校が作って、教科担任が指導できるようにして学習の保証をすることを模式的に示したものです。

3校でL教室を設置するにあたっては、教育委員会として、このような実施要綱を作成しました。ここに、教室の運営に関する校長の役割を明記して、学校全体に不登校対策が充実するようということ、作ったものです。この実施要綱を基にしまして、各校が設置要項を作成して、4月にスタートしました。これは、校内の職員の共通理解を図る上で、非常に大切なものです。これは、桜ヶ丘中学校のものです。このように、目的から順番に簡潔に示しています。ここに、教室の運営管理というところがありますが、L教室専用の時間割を作成すると、先ほど申し上げたようなことも明記してあります。この設置要項を基にして、L教室を紹介するチラシ、文書を作成して、生徒や保護者と懇談するときに活用しています。これは、緑ヶ丘中学校のものです。ここに、1日の生活を自分で決めることができるということが書いてあります。これは、桜ヶ丘中学校のものです。ここにも、登校時間や学習計画を自分で決めることができると書いてあります。つまり、自分に合ったペースで活動できるということを強調して、懇談を進めて入級者を募ってきました。

実際のL教室の環境を、緑ヶ丘中学校を例にご覧ください。教室の前半分ほどのスペースは、普通教室と同じように、机、椅子が並んでいます。タブレットを置きやすいように、机を少し広げてあります。その後ろには、テーブルがこのように置いてあります。パーテーションで少し仕切って、テーブルが置いてあります。ここでは作業したり、仲間と話をしたりできるようになっています。写真右の窓側には、パーテーションで仕切られたスペースがあります。これは、1人で集中して学習したい時などに利用することができます。

L教室専用の時間割を作ることになっていますので、この例のように、5教科の教科担任が、来室して指導できるというのですが、緑ヶ丘中学校の実際の時間割は、このようになっています。国語や数学の教員が3時間

ずつ入っている一方で、理科や社会、英語といった、教科担任が入ることができていません。これは、持ち時間、教員の授業時数の関係で、どうしてもこういう歪みが出てきます。その代わりに、家庭科の教員が多く入るなど、他の教員でカバーしています。

そこで、今の時間割だけでは不十分ですので、このような工夫をして、生徒の学習を保証しています。黒板に、先ほどの時間割とは別の時間割が掲示してあります。この左のところに3つあります。3年、2年、1年と。これは、オンライン授業の時間割です。緑ヶ丘中は、3年生の1つのクラスに常時カメラを設置して、いつでもそのクラスの授業をオンラインで受けることができるようにしています。2年生も特定のクラス、1年生も特定のクラスを常時カメラで追っています。そのため、生徒は、L教室専用の時間割と合わせて、この全てをカバーする時間割を見て、自分に合った学習を進めることができるようにしています。

L教室に登校した生徒は、例えば、このように、毎日、自分で計画を立てます。そして、1時間ごとに、授業後に振り返りをします。この右側に担当の先生からサインというところがありますが、その見届けを、室長や来室した教科担任などがするようにしています。この日、12月18日、この子は4時間勉強して、給食前に下校していますが、帰りの会では、1日の振り返りをして、室長もこのようにコメントを書いたり、言葉をかけたりしています。この用紙を、全ての生徒がそれぞれのファイルに閉じていますので、多い子になると、本当に分厚くなっています。生徒が頑張った証をこうして残していくということです。

室長からは、このような生徒1人1人の通級状況報告書を、毎月、我々の方に提出してもらっています。これは、先ほど活動計画表を紹介した生徒の12月の通級状況です。毎日規則正しく登校して、学習に向かっていることがわかります。学習の時間というところに、4とか3とか書いてありますのは、それだけ、学習したという証拠です。実は、昨年度183日間もの欠席があった生徒で、今年度はまだ4日しか休んでいません。

12月末現在ですが、L教室の生徒の状況を詳しく見ていきたいと思えます。入級者は42人です。そのうち24人が3年生、29人が女子という特徴があります。この42人のうち、13人の出席が昨年度より増えています。出席が増えたと申し上げましたが、出席率をこのように算出をして、昨年度と今年度の出席率を比較して、出席率が上がったかどうかということを1人1人見ていきました。

例えば、実際の生徒ですが、Aさんという生徒がいます。今年度の出席率は97%です。これをグラフの横軸で表しています。横軸が、令和5年度の出席率で、昨年度の出席率は実は9%だったので、今年度と昨年度の出席率の差が、97引く9で88%になります。これをグラフの縦軸で表しました。したがって、この丸で囲んだ点が、Aさんを表しています。ところが、Aさんのような子ばかりではないので、例えば、Bさんのように、今年度の出席率が昨年度より下がった生徒もいます。これが、Bさんの位置になります。入級者42人全員をグラフ上に表してみると、こんな分布になります。

先ほど言いましたが、出席率が上がった13人、この赤色の枠内の生徒ですが、これが、昨年度より出席率が上がったという生徒になります。

今年度の出席状況だけで見えますと、こんな見方もできます。22人が今年度50%以上出席している生徒で、赤で囲った部分になります。緑の部分を見えますと、これは9人ですが、欠席が30日未満で、実は出席率が85%以上ある生徒です。出席率が大体85%以上となると、欠席が30日未満、つまり30日未満というのは、定義上は不登校ではなく頑張っただけで学校に来ているという生徒になります。

出席率が上がった13人について、もう少し詳しく傾向を見ました。このグラフは、3年生だけの出席率をプロットしています。右の表は1、2年生の出席率です。1年生は4人いるんですが、赤色で示してあります。3年生と1、2年生を比べてみると、何か特徴が見えてきませんか。つまり、出席率が上がった13人のうち、9人が3年生ということになります。

では、L教室、4月から開室していますが、12月末現在で42名と申し上げましたが、実は1月に入って3名また追加で入級しているので、毎月順に増えています。それで、時期によって何か違いがあるのかと。L教室に入った時期ですが、4月時点、一番最初に開設した時点で入級者は13人でした。その後、各学校の不登校対策委員会で検討して、徐々に入級者も増えてきたということになります。左のグラフは、4月から7月、つまり1学期までに入級した生徒、右は2学期以降に入級した生徒の出席率を示しています。違いがお分かりでしょうか。出席率が上がった13人のうち9人が、4月から7月に入級した生徒です。早い時期に入級した生徒の出席率が伸びているということは、L教室の運営の成果であると言えます。つまり、8月以降に入級した生徒も、今後L教室で過ごす日数が増えて、出席率が上がっていくだろうと考えたいわけです。やはり、L教室で過ごした環境が順番に自分に合っているということで、早く入った方ほど、L教室に通っています。だから、今月入った子も、3人のうち、L教室の環境が合う子は必ずいると信じたいので、増えていくのではないかと思います。

では、同じ不登校と言っても、昨年度は、授業日数は約200日でしたので、半分以上欠席をしていた生徒がどうかということで、赤色の点は、昨年度の欠席が100日を超えた生徒です。入級者の42名中、出席率が上がった13人中10人が、実はこの長期不登校の生徒であることがわかります。したがって、長期不登校の生徒にも、L教室は、有効に働いていると言えると思います。さらに追跡調査をしてみると、例えば、この生徒は、小学校6年生から連続して3年間長期不登校でした。この生徒もそうです。3年間不登校が続いている。そして、この生徒もそうです。3年以上不登校が継続していた生徒を調べてみると、この3人以外にも緑の丸で囲った生徒が、3年以上の長期不登校でした。この長期不登校の9人のうち5人の出席率が上がっているということから、何年も連続して長期不登校の生徒の生活改善にもL教室が果たしている役割は大きいのではないかと考えることができます。

実は、この生徒の母親からまなびセンターに電話相談が4月13日にありました。その記録に母親の言葉が残っています。学びたい意欲があるのに、子どもの実態に合わせてやってくれる場所はないのでしょうか。という母親に対して、L教室が設置されたことを伝え、学校と相談するように伝え、担当が話しました。その後、母親と生徒は学校と懇談をして、この生徒の入級が決まったという経緯がありました。現在、この生徒は、毎日L教室に通っています。小学校5年生の途中からずっと給食を食べることができなかつたそうですが、12月1日から学校で給食を食べて下校できるようになりましたということが書いてあります。

学校には、昨年度までL教室はありませんでしたが、学校によって、名前はいろいろありますが、いわゆる別室とか支援室と呼ばれている別の部屋で過ごした経験が、42人中何人いるかということ調べてみると、この赤い点が、別室で過ごしたことがあり、出席率が上がった13人中10人が、何らかの形で別室登校を経験しています。したがって、現在、L教室がない学校においても、学校の別室の運用を工夫、改善することが、不登校解消のために重要であるということも言えます。

それでは、L教室の成果をこれまでお話ししたことからまとめてみます。まず、今年度の出席率について言えることです。欠席30日未満の9人は、現時点では不登校は解消していると言えます。次に、昨年度と今年度の出席率の比較から言えることです。これらのことから、大きく次の2点に整理してみました。L教室は、学力に対する劣等感が主な要因で、不登校が長期継続していた生徒にとって特に有効である。そして、昨年度までに別室登校を経験した生徒の多くは、L教室を居場所として登校できている。学力に対する劣等感と申し上げましたが、実は、各学校の室長との懇談で、いろいろ聞き取りをして、ある室長は、こういうことを言っていました。勉強ができないということを周りに知られるのは嫌だという生徒がいます。そういう子にとっては、L教室が本当にいいということを語ってくれました。それから、こんなことを語ってくれた室長もいます。不登校の要因として、家庭環境が影響していることはありますが、この例は、生徒の状況が改善してきたことにより、家庭環境の改善につながっているという例です。一方、課題の1つ目としては、L教室に適応して、不登校が改善している生徒となかなか改善しない生徒というのは、割とはっきりしてきています。特に、友人関係が主な原因で不登校になっている生徒は、L教室で過ごすことは、なかなか難しい。まだ、その段階ではないということも言えるかもしれません。このような生徒への支援を考える必要はあると思います。それから、課題の2つ目としては、不登校が増えている現状ですが、全ての生徒が、L教室の入級対象とはなりません。ただ、学校としては、何人かいる不登校生徒に対して、この子をL教室に入れた方がいいのかどうかなど検討を重ねて、この検討が非常に難しいということも、どの室長も言っていました。

今後の不登校対策について、少しお話をしたいと思います。このグラフが示す通り、不登校が年々増加している現状があります。今年度の12月末現在で、すでに小学校は昨年度の不登校者数を上回っています。先ほど、

昨年度までに別室登校を経験している生徒の多くがL教室を居場所として登校できているというお話をしましたが、L教室を拡充する一方で、それと並行して、各学校のいわゆる別室の運営をより現状に合うように改善していくことが急務だと言えます。

そのために、各学校の別室の運用規定とか利用規定というのを、今一度、学校の実情に合わせてしっかりと立てるよというを、先日の校長会でも伝えました。一方で、対人関係等が理由で心が不安定な生徒に学校内外で対応できる各種プログラムを考えていく必要があると思います。

緑ヶ丘中学校のL教室の前面に、こんな掲示物がありました。七夕の掲示物ですが、そこには、L教室のみんなと遊びたい。頭が良くなりた。卒業してもみんなに会いたいです。目指せ100点。などという願いが書かれています。願いを持って生活していこうとする生徒のために、今後もL教室をはじめとする不登校対策に力を入れたいと考えます。

ご清聴ありがとうございました。

○山下市長

ありがとうございました。それでは、ただいまご説明をいただきましたので、ご質問やご意見を承りたいと思います。

○末松教育委員

ご説明ありがとうございました。とてもわかりやすい説明でした。

去年もこの回で不登校のことが話題になったと思いますが、学力の不振であったり、心の問題であったり、家庭の環境であったり、不登校は、本当に多種多様な要因があるので、とても難しいなということをつくづくと感じています。その中で、今のお話は、非常に効果的であったと思います。多分、今年1年間、この事業を手探りで進めてみえたことも多いと思いますし、大変な思いをされながら、運営してくださっているのではないかと思います。子どもたちの姿が変わってきたということに感銘を受けました。

自己選択をするということ、とても大事なキーワードだと思いますし、それから、この目的にあります社会的自立を促す。学校に行けたら丸っ言うだけではなくて、自分で責任をもって選んで、そしてそれが、社会的自立を促し、その後の自分の人生に生かしていくような目的は、本当に大事なものだと思います。

今のご説明でもご丁寧にいろいろしていただいたんですけども、不登校は増えているということで、小学生は、12月の末時点で、すでに去年を超えていることもありました。どのようにしてその芽を摘んでいくかという点が課題であると思いますし、中学3年生が非常に効果的だということの中では、自分自身の進路を考え出すという時期であることが大きな要因であると思います。先ほどの各学校の別室運営のお話や市長さんのお話にもありましたが、学校の中だけではなくて地域の居場所ですとか、福祉部局との連携を図ることも本当に大事なことになると思って聞かせていただきました。ありがとうございました。

○米山教育委員

今お話を聞いていて、末松先生がおっしゃったように、このL教室によって、子どもたちが自分自身の今まで見えなかった可能性が広がってきたということを数字の結果からも感じられました。

特にお話の中で、保護者の方が、学びたい意欲はあるのですが、子どもの実態に合わせてやってくれる場所はないのでしょうか。この辺りは、すごく重要なところで、教員数も厳しい状況の中で、それぞれの学校の別室運営が子どもたちの実態に合わせてどこまでやっていただけるのか、オンラインという活用が、今後ますます必要になってくるだろうと思いました。

最後の七夕に書かれている子どもの願いの内容を見て、すごく胸がジーンとしてしまったんですけれど、どの子ども本当にみんな勉強したい、少しでも頑張って高い点数を取りたい、みんなと仲良くしたいんだっていう思いが普通にあることを感じて嬉しかったです。さらに良くなっていくことを願っています。ありがとうございました。

○清水教育委員

今、説明を聞きまして、42人のうち9人が改善されたということで、これはもう大成功だと思います。100%というのはなかなか難しいんですけれども、1人でも学校に行けるということは素晴らしいことだと思います。それと、成果と課題の2番目ですが、生徒が登校できるようになったことで、不安定だった保護者が仕事に行くことができるようになった。それが相乗して家庭内の雰囲気良くなり、さらに登校が安定してきた生徒が何人かいる。これは、多分、家庭も子どもさんが学校に行かないと暗かったと思いますが、少しでも改善されて、家の中が明るくなったところが素晴らしいことだと思います。

ただ、授業の時間割の中で、保健体育というのは座学でいいと思いますが、実際に体を動かす体育というのはないですか。

○寺澤まなびセンター副所長

教室から外へ出る活動については、なかなかすることに抵抗がありますので、やりたいと言えば、体育館へ連れて行って、少し運動することはもちろんできますが、まだそういったリクエストはないとは聞いています。

○清水教育委員

それともう1点、まだ、今年度始まったばかりですが、特に3年生の進路に関してどういう希望をされているのかお聞きしたいです。

○寺澤まなびセンター副所長

現在L教室に所属している3年生は、1人がまだ流動的と聞いていますが、あと全員は進学先を決めています。多くは通信制ですが、全日制を希望している子どもこれから受験する子どもいます。

○清水教育委員

そうすると、かなり改善されたという風に考えてよろしいでしょうか。

○寺澤まなびセンター副所長

何らかの勉強をして、そこに向かっていけるということ、そういう力がついてきたということは、改善していると考えてもいいと思います。

○清水教育委員

今は働き方も随分変わってきまして、毎日9時から出社するという勤め方ではなく、例えばインターネットで家でも仕事ができるということで変わってきていますから、昔のように、高校卒業して会社に勤めるとか、あるいは、専門学校、大学を卒業して勤めるという勤務形態も随分変わってきていますが、それでもやはり現状は、勤務するというということになると、8時間勤務ができる、あるいは週5日勤めることができるということが基本になっていますので、少しでもこういうことで、毎日学校へ行ける、あるいは授業が受けれるということが続ければ、将来が非常に明るくなってくるのではないかと思います。L教室は、まだ今年度始まったばかりですけれども、今後も、ぜひ卒業生がどういう進路を選ぶかということを含めて、もっと先まで見ていっていただきたいですし、ぜひともL教室は、続けていただきたいと思っています。

○西部教育委員

以前、教育委員会で桜ヶ丘中学校のL教室を見学させていただきました。子どもたちが本当に一生懸命学んでる姿と学べる環境の現状を見させていただいて、すごくいい取り組みだと感じていました。

今日、1年間の成果を聞かせていただいて、やはり中学生になると勉強の量もすごく増えますし、スピードも早いですし、内容も難しくなって、ちょっと親では教えてあげられないが増える中で、そこについていけない、だから学校に行きたくないという子に対しては、とてもいい居場所ができているんだなと感じました。

毎年、この会議の時に、身内の話をするんですが、相変わらず、月に1日とか学校に行けないことが続いていて、その理由としては本人曰く、頭が痛いとかお腹が痛いなんですけど、熱があれば数字で見えるので、じゃあ病院に行くということになるんですけど、お腹痛い頭痛いの後ろ側にある本人の気持ちが、恥ずかしながら、なかなか親でもわからなくて、行きたくなくてお腹が痛くなるのか、本当にお腹が痛くて行きたくないのか、いつも迷うところなんですけど、今日の話も聞いて、行きづらくなる理由は、本当にその子それぞれで、1番最初に何か理由がきつとあって、行きにくくなって、だんだん行けなくなったり、長期化してしまっているのかなと思ったので、こういう居場所があるということ子どもたちがあらかじめ知っておくことも、すごく大事だなと感じました。

11月に、岐阜県市町村教育委員会連合会研究総会に参加させていただいた時に、各務原市の安心できる居場所作りという取り組みのお話を聞か

せていただきました。各務原市では、いろいろな取り組みをされていて勉強だけじゃなく、小中学生の子どもたちは、自分がやりたいことができる居場所が市内にあるそうで、そこで勉強したり、本を読んだり、収穫物を使って料理するなど、地域の方とも関わりながら社会に出ることができる居場所があるということを知りました。このような事業を心が不安定な状態から脱しきれていないお子さんは、なかなかL教室で過ごすことが難しいと書かれてあるので、何か行きづらさを感じてる子に対して、勉強ではないところで支援できる場がもっともっと広がっていくといいなと感じました。

○末松教育委員

多分、保護者の方と面談されたりする機会があると思いますが、どのように連携されているのか教えてください。

○寺澤まなびセンター副所長

詳しくは聞いておりませんが、学校の懇談に合わせて、室長を交えて3者懇談をしたという話は聞いています。定期的にやっていると思います。

○西部教育委員

L教室の成果と課題の1番下のところで、校内の会議で、入級の可否を検討していると書かれているんですが、私のイメージでは、お子さんとか親さんがL教室に通いたいです。学校がいいですよ。じゃあ行きましょうかと思っていたのですが、どの辺が学校は検討が難しいということになりますか。

○寺澤まなびセンター副所長

親さんあるいは生徒から入りたいってということよりも、この子をなんとかしたいという学校側が判断する時の難しさ、親さんから希望された時はそれに対応しますが、そのケースはあんまりなく、学校側が大勢いる不登校の子をまずどのように進めようかという点の難しさという意味です。

○西部教育委員

私は、前者の方しかイメージがなかったので、学校側は1人1人の生徒に、不登校の子にも寄り添って検討して下さってるのありがたいなと感じました。ありがとうございます。

○森教育長

今年度、3つのL教室を開設して、そのうち、2人の室長が会計年度任用職員として担任のように常勤しています。今までは、学校の先生が時間割を工夫していましたが、そうではなく常駐の先生が1人はいるということが大事だと思っています。それを来年度は、もう少し拡充できればと考えています。

中学生では、ある程度学びたいという意欲がある子には、割と効果があ

りますが、これからの課題は、小学生で原因がわからない、はっきりしない子が増えていることです。その子たちは、学びたいとか進路などの意識はなく、友達関係や自分の中の何かにつまずいていると思われれます。今度はそこに手を打つ方策として、地域の方に力を借りるとか、ふれあい教室の職員の増員を検討しているので、その方が地域や小学校の別室へ出向いて、何かやるとか、もしくは、ふれあいセンターのようなところを借りて、勉強ではない活動に参加するなどして、家から一歩出られるようになってほしいと願っています。多分、小学生の方が、保護者は子どもを1人にしておけないので、ずっと一緒にいないといけない。例えば1時間でも半日でも何か活動をすれば、親がほっとできる時間が持てる取り組みを地域の手を借りるなどしてやっていけないかと考えています。

難しいことですが、今後は、小学生向けと心の問題を抱えている子の対応をしていきたいと思えます。

○米山教育委員

今のお話を伺っていて、確かに、中学生の多感な時期に、周りからの指導が入るたびに、心を痛める子どもがいます。私は、定時制高校に一時期勤務しました。その時、外国籍のある男子生徒が帽子をかぶって授業を受けていました。「授業中は帽子をとりなさい」と先生方が指導しても抵抗してとらないのです。あとで他の先生から聞くと、彼が育った国の文化だということです。彼らにとって帽子は、若い子たちのファッションと違う存在なのでしょう。頭ごなしにダメと叱ると、素直な気持ちを持っている生徒でさえも反抗します。正しく教え導くためにはどのように関わったらいいのか、自身が抱えた課題でもありました。

学校生活においては、児童生徒の行動面に対し厳しく指導する場面がたくさんあります。そうした場面において、彼らの背景に何が起きているのか、何を求めているのか、微妙な心の動きを読みとっていただきながら適切な指導をお願いしたいと思えます。

○山下市長

総じて、効果があるという報告だったと思えます。行政としてですが、冒頭申し上げたように、翌年度は、さらに充実しようと思ってるところでしたので、非常にありがたい成果の報告だったと思っています。

この件について特段よろしければ、次の議題に進めさせていただきます。よろしいですか。では、次、その他ということで議題になっておりますが、L教室以外のことでも結構です。せつかくの機会ですので、ご意見ご質問があれば、いただきたいと思えます。

○西部教育委員

学校規模の話をちらっと聞いたんですが、現実的に、どんどん子どもが少なくなっているというところを感じて、今後、学校のあり方ですとか、関市での子育てのしやすさみたいなのが、すごく大事になってくると感じています。先日、関市から子どもに対して、セキチケをいただけると

ということで、大変嬉しく思っています。

先ほど、うちの話をしたんですけど、今日の朝も、ちょっと泣きながら学校に行くところを、私は、大丈夫って聞いたら、うんっていう言葉を自分の都合のいいように解釈して送り出してしまったことを後悔しているところですが、本当に子ども1人1人に寄り添ってくれる場があるということだけを、多くの保護者の方にまず知っていただきたいと思います。普段なかなかL教室に関しても、別室登校に関しても、親は学ぶ場がなかったり、不登校という現実と直面してからどうしたらいいんだろう、カウンセラーの先生に相談するにはちょっとハードルが高いなと思うこともあるので、そういう場所があるということ、懇談会とか小学生の時に、まず保護者だけでも知る機会があるといいなと感じました。

○山下市長

行政のものとしては、感想めいた話で恐縮ですけど、1人の子どもさんの悩みは、その家庭の親さんの悩みでもあるし、大袈裟ですけど、それが結局、社会の悩みに膨らんでいくということになっていくわけです。やはり社会全体で子どもたちを育て見守っていくことが必要だと思います。

子どもたちの数が減っていくのに、不登校児童生徒数が増えていくというのは、やはり重大な状況だと感じますので、そこのところを先生もおっしゃったように、早いうちにしっかりと手当てしていくことが、関市の子どもたちのため、もっと言うとな関市のためだと思っていますので、できるだけのことはしていきたいと思っています。

ありがとうございました。

○後藤教育委員会事務局長

予定しておりました協議内容も全て終了いたしましたので、これをもちまして、令和5年度関市総合教育会議を閉会とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございました。